

ユネスコ会員綱領

心の中に平和の守りを固めよう
すべての人間の尊厳を重んじよう
教育・科学・文化の発展に努めよう
民族間の疑惑と不信を除こう
世界を友愛と信頼のきずなで結ぼう

国際化をユネスコの力で

大切な市民レベルの国際交流

広島ユネスコ協会会長 河村 盛明



「地域、日本、世界―国際化を民間ユネスコ運動の手で」―日本ユネスコの協会連盟の一九八八年度年間活動テーマである。日本の国際化の重要性が叫ばれて久しいが、民間ユネスコがその先頭に立つとうというのである。ユネスコの平和の精神からいっても当然のことであり、むしろ遅きに失したともいえるが、私たち「地域」としても真剣にこの題に取組まねばならないと思う。

世界初の原爆被爆都市として、ヒロシマは早くから国際化を標榜しその実績を残して来た。広島市は今春の第三回国連軍縮特別総会へ代表団を派遣するのをはじめ、中国平和軍縮協会との相互交流や平和連帯都市

市長会議理事会の開催（イタリヤ・コモ市）など国際平和問題に積極的に取り組む計画と聞くが、このさい私たち民間として為すべきことは、もっと根底の部分での市民レベルの交流であろう。ユネスコにおいてはその名の通り教育・科学・文化面になうことになる。

もともとこの種の文化的側面には、民族とか国とかの独自の伝統があると同時に、世界共通の人間の問題としての国際的側面がある。今日の複雑な国際情勢の下では、この国際的側面がより重要な要素であることはいうまでもない。国際間の相互信頼の醸成が緊急の課題とされているとき、この「文化」の共通の基盤を改めて見直す必要がある。目先の状況で動き易い政治や経済の力関係だけではどうしようもない場合は特にそうである。

こういう観点から、広島ユネ

ユネスコのシンボルマーク



ユネスコのシンボルマークは、西洋文明発祥の地ギリシャの首都アテネのパルテノン神殿を形どっています。

パルテノン神殿にまつられている神はアテネ・パルテノスといい、智の神でもあるところから、このマークが使われるようになったということです。

スコ協会では、今年初めから広島市国際交流協会と共催で「国際交流サロン」を開いた。国際交流の体験豊かな講師を招いて、市民の心構えと知識を蓄えようというもので、今後毎月一回会合を持ち、いずれは外国の人々にも参加してもらい地域の国際化を深めたい。

また同様、国際交流協会との共催で國弘正雄氏の「国際問題講演会」を開いて「日本をとりまく国際情勢」を聞いた。この中で國弘氏は日米関係、日中間

係がともに危機的状況にあることから、市民レベルでの国際交流と世論作りの重要性を詳述された。このさいそのことを知りそのつもりになる人を一人でも多く増やして行くべきだろう。ユネスコの活動がその手がかりになるはずである。

以上のような意味で今年は積極的に新しい会員の参加を求め、これまで必ずしも活発とはいえなかった私たちの活動を活性化したい。「国際交流サロン」ももちろんその一つの間ではあるが、それ以外にもいろいろ方法はあるかと思う。会員の方々の智慧を拝借しながら、新しい視野を広めて行きたい。また他の国際交流団体との交流もより一層深めたい。「地域の国際化を広島ユネスコ運動の手で」―を合言葉に、ぜひ多くの人々のご協力を得たいと思う。

内海巖先生のご逝去を悼んで



ありし日の
内海 巖先生

広島ユネスコ協会の内海巖

顧問が、昨年八月二十二日、急逝されたことは、すでにみなさんご存知のことです。先生は、当協会生みの親であるとともに、日本における民間ユネスコ活動の振興に多大の貢献をされました（現職は、日本ユネスコ協会連盟副会長。ここでは、先生のご逝去を悼み、お二人の方に追悼文をよせていただきましたのでご紹介いたします）。

国際理解教育の第一人者として活躍

常任理事 伊東亮三

昨年昭和六十二年八月二十二日、内海巖先生が心筋梗塞のため七十九歳で急逝された。ここに謹んで哀悼の意を捧げます。

先生は、明治四十年京都府でお生まれになり、京都一中卒業ののち広島高等師範学校に入

学、卒業後師範や女学校の先生をされたが、また広島文理科大学哲学科に入学された。昭和二十年広島高等師範学校教授、同二十六年広島大学教育学部教授となられ、四十六年ご退官になった。

ご退官後比治山女子短期大学教授、青少年育成広島県民会議副会長、会長その他の分野で、教育、社会のために貢献された。

先生の、文理科大学哲学科におけるご専攻は国体学である。

戦争中におけるこの国体学の研究が、戦後におけるユネスコ活動、国際理解教育研究へと転化する過程や心情について、残念ながら先生に直接お聞きする機会がなかった。そこには、厳しい悔恨や葛藤があたりだったと思われる。お亡くなりになるまでの、ユネスコ活動への、先生のあのご執念を、私はいつも戦争中における国体学と重ね合わせて見ていた。私を含めて、一九三〇年頃に生まれた人びとは、何らかの形で戦争を引きずっているものである。

先生は、新生広島大学の出発とともに、高等師範の流れをくむ教育学部の社会科教育学教授

となられた。戦後社会科教育は、新教育の中核教科として、戦前の軍国主義や国家主義を払しょくし、民主主義的、平和主義的な国家・社会を形成する未来の市民を形成するという課題をもっていた。そういう社会科教育の研究・指導を通じて、先生は、広島大学初代学長である森戸辰男氏の勧誘を受けて、ユネスコ活動に近づいていかれる。（森戸辰男氏と広島文理大の最後の学長である長田新氏とが中心となり、広島ユネスコ協会が作られる。）

昭和二十年代の末期に、国際的なユネスコ協同学校計画に森戸氏のおすすめの下に参加され、後に、この計画のスーパーバイザーとなられる。昭和三十一年以来、数年間文部省の視学官となられ、その職務から、学校の国際理解教育にかかわられまた社会教育の方で民間ユネスコとかかわりを持たれることとなった。

その後、広島大学教授に戻られ、昭和四十八年には広島ユネスコ協会を再建されたこと、また、広島県ユネスコ連絡協議会会長、日本ユネスコ協会連盟の中央委員や副会長としてのご活躍は、河村会長がお書き下さると思うので触れない。

ユネスコ精神を 卒先して体現

会長 河村盛明

先生は社会科教育学の研究・指導の中で、社会科と深い関係にある国連教育や国際理解教育の研究・指導に向かわれた。その研究は、単なる観念論でなく、実践と深くかわったものであり、わが国の国際理解教育に関しては、第一人者であったといつて過言ではない。

発足にあたり、日本ユネスコ協会連盟の共催をお願いした時だったと思う。以後同映画祭の実行委員、審査委員としてずっと一緒に過ごしていたのだが、会合にはほとんど欠席されることなく、きちんと姿勢を正して熱心に討議に参加されていた姿が忘れられない。

二十一世紀に向けてのユネスコ運動の発展を願い、先生の安らかに眠られることを祈ります。

そのうちに私自身ユネスコそのものに関心を持ちはじめ、特に、心の中に平和のとりでを」というユネスコ憲章に深い共感を覚え、映画祭で度々顔を合わせていた故小倉馨さん（元市長室次長）や松原博臣先生（現広島ユネスコ協会に入会させてもらった。内海先生から無理にお誘いを受けた記憶がないのは個人の自由意志を尊重されるお考えからだつたのだろうか）。

広島ユネスコ協会の柱として事ごとにお頼りしていた内海先生のご死去は、突然の予期せぬことだつただけに、ショックもまた大きかつた。七月末、東京でのユネスコ中央研修会で「一緒に、また広島でお会いします」とお別れしたとき、まさかそれが最後になるとは思いも寄らなかった。もつといういろいろお教えを頂きたかつたのに、今もつて残念でならない。

内海先生に最初にお目にかかったのは、昭和四十九年、私が中国放送文化局長として「ヒロシマ国際アマチュア映画祭」の

が、天満屋の角でそのキャンペーンをしたとき、白いタスキ姿でみずからすすんで街頭に立たれたし、高校生のコアクシ



当協会の常任理事、永田龍男氏、会員の榎本克彦氏は、日本ユネスコ協会連盟主催の海外視察旅行に参加され、それぞれ、中国、インドにおける教育事情や文化事情を研究されました。ここでは、両氏に視察報告という形で、両国の事情をご紹介します。

ユネスコ高校生中国派遣団

常任理事

永田 龍男

▼過去の不幸な関係へ

目の前の道が急になくなったように、生徒たちは息をのんで立ちすくんだ。奥行き八、九メートルもあるうか。左右に張りめぐらされたガラス越しに、空ろな眼窩で訴えかけているような累々たる遺骨。思わずその場にうずくまり、手を合わせ、只々「ごめんなさい」を口の中で繰り返し、私は不覚の涙をこぼしていた……南京の侵華日軍大屠殺遇难同胞記念館にある、柩を象った慰霊展示館に一步、足を踏み入れたときのことである。去る十二月三十日。中国各地で笑顔と心からの歓待をうけながら、私たちの中国滞在も終り近

くなっていた。中日両国の過去の不幸な関係については、出発前夜のミーティングで、学習院高等科の越田稜先生から、南京大虐殺と、その背景となる近代日中関係史の講話をいただいていた。また、北京第二中学を訪問した際の、両国の生徒同士の交歓会や、北京市ユネスコ(联合国教科文組織)倶楽部会長の王金瀚先生との会談の席でも言及された。さらに、西安から南京までの列車内での反省会の折にも、全行程を同行してくださった、同倶楽部の秘書長、何徳湘先生からの「南京での犠牲者は三十万人にも達する。だから老人は今もって戦争のこと

を忘れることができないのです。」に始まる率直なご意見もお聞きされていて、ある程度の心の準備はできている積もりであった。しかし、それは所詮、観念的に、単なる知識として頭に入っていたにすぎず、あの場に立ったとき初めて私たち全員の胸にズシリと重く、実感として納得されたのであった。出口の壁に掲げられていた「前事不忘、后事之師」という額の文字に、中国の人びとの過去に対する心の痛みと、未来にかけての平和の決意を見た思いがする。現に、同日、そのすぐあとに訪問した南京第一中学での交歓会で、日本の学生の一人が「日中戦争について、中国の学校ではどのように教えていますか。」と質問すると、「二つの点を強調します。一つは、日本軍国主義の残酷さを暴くこと。もう一つは、日本人も我々と同じくその犠牲になったのであり、両国には長い間の友好的な歴史があるのだから、両国民は子々孫々に至るまで友好を深めていかねばならない、ということ。」という明解な答が華東林校長先生から返ってきた。

▼北京の三日間へ

私たちは去る十二月二十四日に成田国際空港を飛びたつた。全国からの高校生五名、日ユ協連の三宅隆史氏と私の、一行七名である。途中、給油のために大連に立ち寄ったが、実質四時間半のフライトで、めざす北京空港に着陸した。空港では白家瑤先生の出迎えをいただいた。ほんの二か月前の十月末に広島でお会いして以来だったが、「しばらくぶりです。ようこそ。」という流暢な日本語と、あの人なつつこい笑顔がうれしかった。空港を出ると、前述の何徳湘先生と、北京教育学院外語系の徐樹三先生が待っていてくださった。お二人には、私たちが中国に滞在する十日間、つきっきりで随行いただくことになる。チャーターのマイクロバスで、空港から北京市内までの、どこまでも一直線に続く道を快調に走る。市内に入ると、折からの退庁時刻で、夕陽を浴びた銀輪の太い帯が広い道路の両側をゆつくり流れて壮観。ああ、中国だな、と独りつぶやく。

宿は西のはずれにある紫玉飯店という、いかにも中国らしい、龍が欄間に彫つてある木造二階建てで、これが敷地内に点在し、互いに回廊で結んであるという凝りようである。夕食後、「市内の探険(?)に行かないか。」と生徒達に声をかけると、「(二ページから) ヨンの募金活動にも常に先頭に立って居られた。一番忘れられないのは、昭和五十九年の世界大会のときで、百数十名の外国の方々を広島へお迎えするというのに万事一からスタートするという難事業だったにもかかわらず、大きな成果を残すことが出来たのは、組織作りから資金面までこまかく行きとどいた先生のご指示があったからである。そのとき終始一緒にいて、そのバランスのとれたご配慮に感心したり感謝したりの日であったと記憶している。ユネスコの精神を体現するというのは、まさにこういうことであろうと思つたりした。

今にして思えば、広島ユ協、いや私自身は先生に頼り切つていて、何事によらず難題を持ちかけていたような気がする。その「頼みの柱」が無くなつてしまった今、痛切にそう思う。しかし先生が居られなくても「ユネスコの火」は絶やすことはできない。この上は先生が営々と築いて来られた広島ユネスコの伝統を受け継ぎ発展させて行かねばならない。それが先生のご遺志に報いる唯一の道であろう。今はただそのことを願うばかりである。



侵華日軍大屠殺遇難同胞紀念館(南京)

きましよう!」という元氣な声が返ってきた。タクシーで王府井大街へ。十二月下旬の夜の北京というのに大して寒くない。ぞろぞろと歩きまわったあとと東方市場に入り、生徒たちがあれこれ買ひものをしたがるが、とりあつてもええない。「お釣りがない。」などと言う。やがてひとときわたたましくベルが響くと、服務員の皆さんは等しく上衣をかなぐり捨て、部厚い防寒着をまとうと、あつけにとられていて私たちを尻目に、てんで出口へ殺到した。時計を見ると、ちょうど九時。なるほど、そうか。終業時刻を今や遅しと待ちかまえ、客の相手などをしてはいられない時間帯だったのである。公共汽車(バス)も無

軌道電車も常にすし詰めという交通事情のせいもあるが、社会主義体制の一面を見たように感じた。

翌二十五日は、まず少年宮の中にある北京市ユネスコ倶楽部を訪れた。わずか二年前の発足のため日本の経験を学びたい、と前置きして、王会長からいただいたご説明によると、現在15クラブ、会員数約一万。社会公益を活動の柱として、老人対象事業、パンダの救済、長城の修復、アフリカ救援基金などを行っている、との由。ただ、会員は全て団体として加入しており、小中学生が主で、個人参加を認めていない、という点が、止むを得ない事情と知りながら、私には残念に思えた。派遣高校生の「観光はいつでもできる。折角の機会だから、一般の人々の生活を知りたい。例えば近郊の農家を訪れて、如何に物を大切にしているか、どんな工夫をしているかを見学し、自分達の生活を見つめ直したい。」という希望が叶えられなかったのも、活動範囲が教育関係者に限られているせいかも知れないし、また会員の、ユネスコクラブの一員としての自覚も乏しいのではないかと思われるからである。

国では、日本の中学、高校を一貫教育として「中学」と呼ぶところが多い)では、これも二か月前に広島でお目にかかった馮士明副校長に温かく迎えていただいた。「友遠方より来たる…」の引用に始まる歓迎の挨拶と、それに続く学校紹介を熱心にしてくださったために、生徒たちが楽しみにしていた生徒同士の交歓会の時間が短くなったのが、ちょっぴり悔やまれるが、それでも実現していただき感謝している。生徒達は互いに身ぶり手ぶりで足らない英語力を補いながら大奮闘。「彼らはヘルプしないでください。」というウインクひとつで合意した私と英語科の若い許安琪という女先生とは、その間、静かに大人の会話を楽しんだ。なごやかな笑い声が一時間ばかり会議室に響いた。相互に住所を取り交し、今後も文通しようねと別れを惜しんでいる。

同校の歴史の教師であり、童話作家でもある尹霖世先生のお宅に招待をいただき、奥様とお嬢さんの心のこもった手作りの午餐をご馳走になったあと、故宮博物院を見学。その規模に圧倒される。とても一日や二日では足りない。ましてこの小文に明・清朝への思いなどを書ききれものでもない。薄暮の迫る頃に低速シャッターで試みた、皇帝の象徴たる九龍壁がどうにか撮れていたのがうれしかった。五穀豊穡を神に祈ったという天壇公園の祈年殿をあとにする頃は月が光を増していた。夜は、私たちをうけ入れてくださった中国教育国際交流協会からの招宴。百年余の老舗、全聚徳烤鸭店で北京ダックをいただく。副会長の趙冀先生は数年前に私の勤務校でお目にかかっており、更にうれしかったのは、これまた二か月前に団長として広島にいられた高履端先生との再会であった。白先生と共に濃紺の人民服でのご出席で、いささか勝手が違ったが、相変わらずの流暢な英語に、なつかしさがこみ上げてきた。

翌二十六日には長城と明十三陵を訪れた。月から見る唯一の建造物といわれ、始皇帝がその原型を造ったという長城。明代に改修された八達嶺の高きに立つ。十三陵では、唯一、発掘され公開されている定陵の二十米もの地下に潜る。地下宮殿とも呼ばれた陵にある大理石造りの柩、玉座などの殆どが複製とはいえ、万曆帝と二人の後の栄華を偲ぶに充分であった。その夜決行した二回目のいわゆる探險は前門大街。ところが帰りのタクシーが仲々つかまらず、果ては七人が手分けをして「どなたか英語がわかる人はいませんか。」と道行く人に呼びかける作戦。これが功を奏して、やがて応じてくれた青年のお陰で、やつとの思いで一台をつかめる。宿までピストンで送ってもらって事なきを得たものの、風邪でも引かせては、と気が気ではなかった。生徒達いわく「結構スリルがあつて面白かったジャン、先生。」この頃になると、固さもかなりほぐれ、よほど打ちとけてきた。

▼西安、南京、上海にて

北京での三日間で紙面も尽きようとしている。あと西安、南京、上海については、文字どおり駆け足でお許しを願いたい。

中国民航で一時間半、西安を訪れ、丸一日滞在する。性懲りもなく第一夜に、また探險行。見るに見かねてか、何先生が加わってくださる。一同、大船に乗った気分て解放路沿いに並ぶ屋台から道すがらさまざまな食物を求め、皆で分けあい、頬張りつつ散策する。私たちが近づくと、ひととき高い客寄せの声。取り巻く笑顔。生徒同士の声が耳に届く。「これが生活、なんだ



北京第二中学にて

よねー。」ダスターコートをまとい、肩をすばめて歩く何先生は、この夜から「コロンボ先生」という敬称で生徒から呼ばれるようになる。

「世界第八大奇蹟」と呼ばれる秦兵马俑壹号坑大廳内の大パノラマを眼のあたりにして、始皇帝陵墓を護衛する兵馬連隊の、二千年前の息吹きにじかに接する思いがした。華清池では、玄宗皇帝と楊貴妃のロマンスよりも、蒋介石幽閉の建物の前に立ち、西安事件についての解説の方に生徒は強い関心を示していた。陝西省博物館で「ユネスコ指定になる世界50重要博物館の一つ」という文字を見つけた。次は碑林でのこと。碑を背負った石亀に頭部が欠損したものが

あり、尋ねると、徐先生は悲しい顔でこう呟かれた。「文化大革命の所産です。」そう言えば北京で訪れた頤和園でも、壁面の陶製の小仏像群が無残に碎かれた跡をとどめた仏閣があった。旧体制打破のうねりは、同時に、こうしたかけがえのない文化遺産の喪失を伴ったという。

次の訪問地、南京については冒頭で述べたとおりである。さらに忘れられないのは、私たちの無理な希望にもかかわらず、実現していただけた京劇観賞である。江蘇省教育委員会の袁雲亭先生のご尽力に感じ入った。加えて、その演題が「霸王別姫」。劉邦の軍に包囲された霸王、項羽と愛妃虞姫との別離、いわゆる「四面楚歌」のくだりであった。台詞はわからずとも、舞台をく

い入るようにつめる生徒達の眼。「まさかと思った。感激しました。学校で習ったばかりだもん。」帰り道で口々に言う。上海では、上海外国語学院附属中学の十数名の生徒の熱烈歓迎をうけた。「日本のみなさま、ようこそいらっしやいました。」全く訛りのない流れるような李彬君の司会である。全員日本語専攻で、学習歴はわずか三年という。「掌に太陽を」をはじめ、

日本語で、歌詞も見ず、数曲を歌ってくれた。そのあとの交流会もお互いに日本語で、かなり充実した内容の意見交換ができた。と聞く。時は十二月三十一日の午後。中国では春節を祝うが、元旦も休日である。然るに彼等はその休日を返上して、翌日も派遣生の案内役をかって出たのである。虹口公園の入口を起点として、数時間の自由行動があった。楽しそうに語らい

ユネスコスタディーツアー(インド)

会員

榎本 克彦

一月三十日から二月七日までの九日間(財)日本ユネスコ協会連盟が主催する、スタディーツアーでインドを訪ねる機会を得ることが出来た。

この企画は、ユネスコ・コアアクション活動を通して協力しているインド南部アラビア海に面するカルナタカサマンガロア・ユネスコクラブの対象施設や関連団体を訪ねて、募金がどのようにに生かされているか、またどんな協力が求められているかを、実際に現状に触れることが研修の主目的であり、アジアのうちのインドを深く理解するための旅でもある。富山ユネスコ

ながら思い思いの方向に散っていく五つの輪を見送りながら、私はこの十日間の中国派遣の成功を確信した。

上海市教育局の張進先生のご協力で、私が十一歳のときまで住んでいた生家を首尾よく捜しあてることができたことを、蛇足ながら付記しておく。四十二年ぶりの感慨。ときに一九八八年一月一日。言葉もなかった。

協会の長谷川龍雄氏を団長とする一行九名による訪問団であり、全員無事帰国し早々ではあるが、その印象の一部を紹介したいと思う。

▼出発前に

いったいインドがどんな国なのだろうか、自分の本棚を探しても関係する本は皆無に近い。書店で探そうと足を運んだが旅行案内風の本がやつと三冊入手できただけであった。幸いにも出発直前に広島ユネスコ協会の大先輩などから数冊借りることが出来たものの、「インドは不思議な国」と言うのが共通した結びであり、是非一度は見てお

くと良い——との提案が見られた。やはり一度は見ないと何も口に出来ない。しかし何を見てようかと考えて見たもののサブテーマが絞り切れない。また、働く人達に関心を向けて見るのも理解に連がるのではないかと密かに決めていた。

国内を出発する前日、事前学習会が催された。その内容がインドの多様性、そしてインドの抱える問題——NHK国際局の荒木重雄氏を講師に迎えての話題提供であった。——八億数千万人の人口、言葉、宗教、身分差別を含め、その多様性がどんなものであるうか、貧困、飢餓輸出など多くの問題を抱えるインド——を知り、団員に課せられた期待、その重大さを新たに痛感したしだいである。

▼インドへ

成田を三十日十二時十五分に出発、エア・インディアの機内に入るとすでに異国の地へ歩入った錯覚さえたものの、パンコックには日本時間で二十時十五分に着き、一時間後に出発。デリーを経てボンベイに着いたのが三十一日の午前三時(日本時間)過ぎで、三時間半の時差があり、インドの真夜中であったが、その間機内から見た夜のタイ、ビルマなどの下界は雨期



ボンベイのスラム街 遠くに高層ビル街

人経営のホテル・ブレジデントに入ったのがインド時間の午前
三時過ぎ。外気温二十二度で快
適な夜だが全く暗くて周辺のよ
うすがわからないまま、一夜を
過ごした。

ボンベイは約八百五十万の人
口をかかえる大都市である。一九
七三年の大かんばつにより、周
辺の農地をすてて約三百万の人
たちが都市に流入し、スラムを
作り住むようになったと言われ
る。その対策も推進されてはい
るようだが、ここ数年続くかん
ばつでさらに流入を招き、公園、
湿地帯、砂浜べりなどの空地が
スラム街へと……。そのスラム
も超過密化して、ボンベイの街
は二人に一人はその住民だと言
われている。

を前に、あちこちで焼畑が目
に付いた。当初山火事ではと思っ
ていたが、隣りに座ったインド
の人の説明でやっと理解できた
ものの、その火の数、煙には驚
くばかりである。燃料をあえて
多量に消費してまで畑作り。肥
料さえあれば何んとかできるは
ず。広大な土地だけにど暗い下
界を見ながら思いにふけた。

▼ボンベイ入

長旅ではあったが、無事到着
した時は、事故さえなければと
祈っていただけに内心喜び、
その疲れも全く忘れていた。バ
スでホテルへ約四十分、バスの
窓ガラスが割れ、街灯も薄暗く
て、まるで戦争体制下のよう
にも見えたが、その道路の広さは
驚くばかりであった。フランス

ルとも言われるインド門を見学
した。

帰路、タクシীর窓から見た
スラムは、ホテルから左側、ほ
んの八十メートル位にわたっ
て、数百軒が建ち並んでいる。

訪ねたいと思ったが飛行場への
出発時間であり、再びバスに乗
った。運転手もなるべく繁栄し
た街とアラビア海の素晴らしい
風景を満喫してもらおうと大
サービス。高層ビルの続く街を
通り貫け、海廊を渡って干潮時
のみ礼拝できる珍しいハジア
リモスクなどを見ながら観光気
分を味わっていたが、そのモス
ク付近の浜辺にスラムがあっ
た。四年前に地球上から撲滅し
たとされるハンセン病、その後
遺症に苦しむ人たちのスラム前
にさしかかった時には、一瞬声
も出なかった。小学五・六年生
ぐらいの子供たちが二十人以
上、無邪気に遊んでいる姿は、
生涯忘れることができないもの
であった。

国内線でマンガロアへ出発、
いろいろ手続きをやっている最
中、電話連絡が必要となり、小
銭が必要。両替してくれる店も
ない。とっさに荷物検査付近を
警備している保安官に一ルピア
を小さいコインに両替をたのん
だら、保安官のうち三人がポケ
ットからコインを出して「あげ
るよ。ところで電話のかけ方を
知っているかい」と言い、キャ
プが、ていねいに教えてくれた。
ダイヤルをまわして相手が出た
瞬間にコインを入れるわけで、
日本式に入れるとだめというわ
けである。お札に再び行くと、
「よい旅をして下さい」との返
事だった。しかもこのやりとり
を見ていた空港職員は「貨物室
に載せる荷物にまちがいはない
か、もう一度チェックして下さい
よ」と言い飛行機に積み込む
直前の荷物のところまで案内し
てくれた。その親切さは団員た
ちも大感激であった。あとでわ
かったことだが、インドの人た
ちの独特の助け合いの気質の表
われとのことを教わり、なるほ
どと思った。

▼マンガロア着入

着陸寸前に飛行機がバウンド
して機内が一時騒然としたがま
ずは無事到着。マンガロア・ユ
ネスコクラブの人たちが二十余
名、ドウソウザ神父をはじめ、
大歓迎して頂いた。ジャスミン
の花の首飾りを団員のひとりひ
とりにかけてもらい、歓迎のセ
レモニーが続いた。あたかも数
年来の友との出会いのようでも
あり、再会を喜ぶ団員たちの口
からはふるさとに久しぶりに帰

ったような気持ちとの感想であ
った。サリーを着た美しい若い
養護施設の先生が声をつまらせ
ながら握手して「本当にありが
とう。しっかりと見て帰って下さ
い」と話かけて来た時は一瞬と
まどってしまった。

当地のユネスコクラブで用意
してもらった八・九人乗りの小
型マイクロバスとユネスコ募金
で活躍中のジープに分乗。ジ
ープは乗りごちが悪いが、荷台
を改造し六人は乗れる。つとめ
てジープに乗ったが、団員が乗
りたがらなかったこともあり、
神父とも当地のクラブ員とも気
楽に話が出来た。

飛行場から三十分、街の中心
地、バスターミナルに近いナバ
ラホテルに入ったのが、十五



ジョウティー ナガールのスラム



講演中の國弘正雄氏

Ⅲ 國弘正雄氏を迎えてⅢ

国際問題講演会を開催

時過ぎであった。いよいよ公式行事のスタートでもある。休息も最少限に、神父が用意してくれたスケジュール表に従って、ミーティングが続く。団員は英会話が得意らしく、それぞれ知り得たトピックスを交換したりもした。マンガロアの市長も突然ホテルにあいさつにこられ、翌日に市長室のパーティーにも招待されるなど思わぬ行事も入ってくる。夜は歓迎のレセプションも行われ、三時間余り、インド料理も次々テーブルに出され、食べながら活動や習慣、世

間話など楽しいひと時を過ごすことが出来た。

Ⅴ施設の訪問Ⅴ

三十万人の人口のマンガロアのなかの六つの貧しい環境にある子供たちの通学あるいは収容施設を訪問し、そこでも大歓迎を受けて交流を深めたが、これらの施設については、一九八三年四月一日付の日本ユネスコ新聞に紹介されているので全容をばくが、ジョウティ・ナガールのスラム街に完成した保育園の開所式に出席し、地区を視察したりしたので触れておく。

千五百人の住民は、数年前三百マイル離れた農村からマンガロアの海岸に移り住み、生活をはじめ、三年前に強制撤去を命じられ、ナヴールへ移され、再びスラム生活を送ることになったが、市の援助もあり一所帯千ルピア(約一万円)が貸し付けられ、住居の建築を奨励、次々と建築が進んでいたところでもある。水をくむ井戸が一所、トイレはやつと保育園に併設されたという。その中にユネスコ対象の保育園が完成したわけで、子供たち、そして地区の人たち

を含め、千人余り集つてのオーブニングは祭り気分そのものであった。建物も完成したが、机も教材もない。もちろん今のところ運動場もなければ、遊具もない。水道もないが、しかし子供たちの夢はふくらみ、民族舞踊など次々と見せてくれたりした。

ユネスコからの援助金は、洪水などで水につかる通学路の整備や学用品、教材などの購入費などに有効に使われていたようだが、まだまだ不足気味。子供たちはノートを使うこともなく

広島ユネスコ協会では、去る三月二十三日、県民文化センターホールにおいて、(財)日本外交協会、(財)広島市国際交流協会

と共催し、国際問題講演会を開催いたしました。講師は、東京国際大学教授、日本テレビの解説委員、ニュースキャスターとしておなじみの、國弘正雄先生で、「日本をとりまく国際情勢」と題して、約二時間のお話をいただきました。講演の内容につきましては、後刻、形をかえてご紹介いたしますが、國弘先生の豊富な海外体験とすぐれた識見に基づく世界情勢と日本のおかれた立場についてのわかりやすい解説は、約四百人の聴衆に深い感銘を与えたようでした。

た。とくに、最後にまとめとしてご提言いただいたこれからの国際化の時代において大切なことは、市民レベルでの交流をとおして、諸外国との理解を深め、あうことであり、そのことが、良い関係づくりに役立つことになる、との貴重なお話は、わたしたちの活動の指針となるものでした。

紙上を借りて國弘先生にお礼を申しあげます。

四月二十六日には、明治大学の越智道雄教授に「アジアの目世界の目」と題するお話をし

国際交流サロンを開催

広島ユネスコ協会は、文化事業の一環として、国際交流サロンを開催することになりました。これは、これまで、当協会

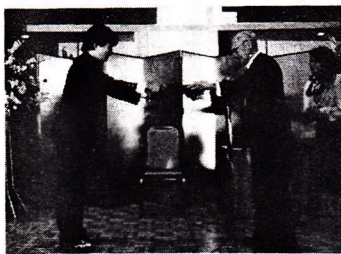
毎月一回程度、著名な講師、学識のある講師を招き、フランクな雰囲気の中で、国際交流、文化などに関するお話を聞きながら様々な情報を得ることをねらいとしています。すでに、去る一月三十日に、備前焼陶芸作家の藤原雄先生に「逆手」と題するお話をしていただきましたし、また、二月二十七日には、琴古流尺八宗家の川瀬順輔先生に「尺八をととした国際交

流」というテーマで貴重なお話しをいただきました。いずれも五十名以上の参加者があり、含蓄あるお話しに、満足されているようでした。

今後、さきほど述べましたように、おおむね月一回程度のペースで行うこととしております。

広島ユネスコ高校生のつどい 全国大会で表彰さる

広島ユネスコ高校生のつどいは、去る十月二十四日、長野県で開かれた第四十三回日本ユネスコ運動全国大会において、その活動ぶりが認められて、他の八団体とともに表彰されました。ここでは、広



数納会長から表彰状を受けとる林幼偉君

皆様も御存知のとおり、「広島ユネスコ高校生のつどい」は、今年で十回目を迎えました。十年という長い歴史の中で、この活動では、当初の「国際理解を深める」という基本目的を一貫して守り続け、毎年毎回のよう

に外国人講師の方々をお呼びして様々な講演をしていただき、少なからず異文化交流をしてきました。つまり、従来の「研究」ばかりでなく新たに「交流」と

いう実践活動を加えたことによって、「つどい」は一層の発展を遂げることができたのです。加えて、街頭募金の実施で一般市民の方々にも呼びかけを行

い、「つどい」はユネスコという組織を介して私達が世界の人々との橋わたしとなり、また私達自らも活動するという喜びのようなものを作り出す場所となりはじめたように思います。さらについ最近から、といつても四年位前からですが、テーマを「中国理解」に絞って、広島大学への留学生の方々を招いて今まで通り異文化交流を続けてきており、その活動が今回の受賞につながったのだと思います。受賞式は去る十月二十四日に長野市で開催された第四十三回日本ユネスコ運動全国大会で行われ、「広島ユネスコ高校生の

つどい」は他8団体と共に表彰されました。大勢の人を前にして緊張しつ放しだった私は、表彰式後の五分間スピーチで大変賞讃され、今後の活躍を期待され、「あつ、やはり何かしなくては」と思いました。そうです、私達高校生が新鮮なアイデアを活かして、明日のユネスコ活動を支えていかななくてはならないのです。

こうしたことを胸に秘めて迎えた第十回の「つどい」は、前々から準備を重ねて二日間に行なわれた交流会を行いました。

初日の十一月十四日、昨夏中国重慶市へ派遣された十名の高校生を迎え、相互に交流しました。談を聞き、相互に交流しました。どの体験談もリアルティにあふれ、現地へ行った人特有の喜びが感じられ、あまり活発な意見交流はされなかったものの、現地で異文化交流の大切さを痛感しました。

続いて二日目の十一月十五日、中国から広島大学へ留学しておられる三名を迎え中国の生活等についてお話を聞きました。書物にはない何か新しいものを得られたように思います。今、こうやって述べてみると、まるで私達が国際理解を果たしてきたように思われるかも

しませんが、実際はまだ目的達成の困難さに四苦八苦している状態なのです。十年の歩みの中でテーマの具体化や活動の拡張などである程度発展はしてきたものの、正直いつてまだ足を踏み入れたばかりです。ですから、今後も地道にこの活動は続けていかなくてはなりません。そのためには、現地での交流が最もよい手段ではあります。が、それに先立ち、まず自分達の普段気づかない問題を考える必要があります。国際人となるには不可欠なことです。その諸問題のうち、まず国籍問題を取り上げてみたいと思います。

これは私が中華民国の国籍を持つているために私自身実感したことなのですが、大分前に募集されたコーラ会社主催のアメリカ合衆国交換留学生の募集要項の中で、応募資格に「日本国籍を有する者」とあり、この語句を目にした時、まず偏見を感じました。コーラ会社は世界中に支店を持つており、国際理解には関心を持つべき立場にあるはずなのに、日本での会社が主催しているから日本人だけにしか資格がないという考え方には納得がいきません。

これをさらに発展させたような問題が、外国人の就職問題です。外国人はあまり待遇がよくないと聞いています。他人と同等の努力をしても報われないのは理不尽に他なりません。これが嫌だと、外国に住むしか方法がなくなります。これはやはり差別です。

皆様はこのようなことを考えたことがありでしょうか？日本はもう国際的になった、とお

思いの人が多いのではないのでしょうか。日本人が気づかないようなことも、外国人は気づいているものなのです。けれどもこのことを認識して、所詮国際理解は無理なんだと勘違いしてはなりません。このような問題を解決することこそ、全国に広がるユネスコ運動の目的であり、そのために私達は国際理解の先頭に立ち、交流の場を広くつくり、また参加する必要があります。先程も述べたように、このことはかなり難しいことですが、少しでも他国の人々を理解し、何年かかろうともやがては世界の人々との交流を果たし、国際理解の最終かつ最高目標である「世界の人々とよりよく生きる」を果たそうとする先がけとなるのが、二十一世紀に生きる私達の課題ではないでしょうか。